

城の中の城

倉橋由美子



IL TE LA DRA
BIAN REXNER

城の中の城

倉橋由美子

新潮社



城しろの中なかの城しろ

一九八〇年二月五日発行
一九八〇年二月二〇日二刷

著者倉橋由美子
くらはし ゆみこ

発行者佐藤亮一

発行所株式会社新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町七

電話 業務部(三)三六―五一
編集部(三)三六―五四

振替東京四一八〇八

印刷金羊社 新宿加藤製本

定価一一〇〇円



© Yumiko Kurahashi
Printed in Japan 1980

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

城の中の城
目次

a	人間の中の病気		7
	城の中の城（第一章～第十七章）		21
b	信に至る愚		285

装画
山下
清澄

城
の
中
の
城

a

人間の中の病気

年下の友人に山田桂子といふ人がゐる。桂子さんは、紋切型を使へば現在「平凡な家庭の主婦」で、二児の母である。昭和四十五年頃書いた『夢の浮橋』といふ小説に出てきて、ある大学の助教授（当時）の山田氏と結婚してからもう八年になる。勘定してみると年は三十歳、子供の二人位ゐてもいい頃なので二児の母といふことにしておく。桂子さんの人となりは、これも披露宴用の紋切型の「才色兼備」が相当程度当つてゐて、「聡明だから料理が上手」といふことになるかどうかはわからないがまづ下手でないことは確かで、本人がもともと「良妻賢母」を目指してゐたことにその才能を加へて考へればほぼそれに近いものに現在なつてゐるのではないかと思はれる。それで桂子さんは「幸福」だらうかときかれてもそれはわからない。第一、「幸福」といふことがわからない。格別不幸でないことだけは確かで、それならば桂子さんも人並みに「幸福」といふことになるのだらうか。

その桂子さんのことを最近必要あつて思ひだした。すると桂子さんの方も当然の如く久しぶりに姿を現したのである。女盛りを迎へて自信と優雅な落着きが加はり、二児の母らしい貫禄までそなはつてきたといった印象についてはここでは措き、また最近夫君の山田氏が何度目かの洋行から帰つてきた等々の近況もここでは省く。桂子さんは目下ある問題について多少考へるところがあつて、今日も実はその話がしたいのだと言ふ。と言つても桂子さんには別段深刻な悩みがあ

るわけではない。結婚当時に比べて二、三キロ増えた体重が容易にもとに戻らないのが悩みの一つで、それも減量に無理をしないために未解消のまま残つてゐる悩みなのである。大体桂子さんは昔から *struggle* といふことが嫌ひであつた。『夢の浮橋』の中でもさう言つてゐる。従つてできないことはできないとして、平然と構へてゐる。また絶えず何かを目指して頑張ることで神経症的な悩みを紛らす必要があるやうな人間でもない。しかし今度のことではいささか *struggle* に近いことをして突破しなければならぬやうな氣もする、と桂子さんは言ふ。

それはキリスト教のことなのである。桂子さんは近頃生じた「家庭の事情」からこのキリスト教の問題を避けて通ることがむづかしくなつたのを感じてゐる、と言ふのである。鷗外は長男に与へて「路溼好尋乾処行」と書いたさうであるが、桂子さんも昔その父君から『森鷗外読本』に出てゐるこの書を見せられた記憶があり、爾來努めて路の溼なるところを避け、*struggle* を避けてきたけれども、どうやら今眼前に大いなるぬかるみが広がり、もはやこれを避けて乾処を行く算段が立たない、と言ふのである。そのことで桂子さんはわづかに腹立たしい思ひをしてゐる風ではあるが、繰返して言ふやうに、苦悩とか煩悶とかに桂子さんは縁がない。目の前に現れた問題が避けて通れない性質のものなら、いつそ一刀両断して通り抜ければよいではないかとアレクサンドロスのやうなことを考へてゐるかどうかはともかく、難敵を承知の上で挑むやうな鋭い光が桂子さんの目に宿つてゐた。と言ふことから明らかなやうに、これは桂子さんが回心を前にして意を決しかねてゐるといふ話ではない。むしろ逆の話である。桂子さんは敵を打倒し、排除して進みたいのである。

正宗白鳥が「この頃の日本では、キリスト教が著るしい活況を呈してゐる」と書いたのは昭和二十四年のことであつた。桂子さんはこの「内村鑑三」といふ文章を知つてゐるが、昭和も五十年を過ぎた今日、キリスト教の景氣の動向にははかに判定できない。クリスマスだけは盛んに行

はれてゐる。しかしこれはキリスト教とは関係のない日本のお祭になつてゐて、街中にジングル・ベルの騒音が溢れ、大人が飲んで騒ぎ、親がクリスマス・ツリーを立てさせられ、ついではサンタクロースの代りにねだられる日である。本物のキリスト教の信者は百万を超えないと言はれるから、日本では信者は百人に一人もゐないことになる。とても大活況を呈してゐるとは言へない状態である。戦後アメリカから民主主義がはいつてきたからと言つて、キリスト教もそれに便乗して大流行といふわけにはいかなかったのである。

その間の事情は、桂子さんの仮説によればかう説明できる。大体、キリスト教はマルクス主義とともに進歩的思想の代表格をなすものである。昔、大杉栄もさう言つてゐる。平民社に集まつてきた人やその周辺で応援してゐた人にはクリスチャンが多かつたが、大杉栄に言はせると、「当時の思想界ではキリスト教が一番進歩思想だつた」ので、社会主義者がキリスト教の信者を兼ねてゐても不思議はなかつたのである。それに対して、「幸徳や堺らはかなり辛辣に宗教家を攻撃もしまた冷笑もした。……しかし幸徳や堺らは、宗教は個人の私事だといふドイツ社会民主党のなにかの決議を守つて、同志の宗教にはあへて干渉しなかつた」といふ。マルクス主義的ラディカリズムとプロテスタントのラディカリズムとが同一人物の中に同棲するのは異とするに足りないが、大東亜戦争後はこの両者の宣伝、布教がいづれも自由となり、特に従来禁圧されてゐたマルクス主義の方にこの自由は有利に働いたので、戦後その勢は当るべからざるものがあつた。しかしマルクス教の方も潜在的な信者を獲得しつくすと、その拡大は止んだ。スペイン風邪や香港風邪の流行が猖獗^{きやうけつ}を極めても全員がそれにかかるわけではないやうに、日本人の間にはマルクス教に対する自然の抵抗力があつて、これにかかる人は限られてゐると見なければならぬ。さらに、これが桂子さんの仮説であるが、キリスト教またはマルクス教といふ一神教型の世界観を奉じることのできる人の割合はほぼ一定してゐるのではないか、と桂子さんは考へるのである。

両者併せておよそ二百万人、つまり百人に二人といふのが感染率の上限ではあるまいか。あるいは、もつと多めに見て一千万、つまり十人に一人はマルクス教かキリスト教かに感染する体質をもつてゐるとしてもよい。ただ、過去にこれだけの数が実際に感染し、かつ発病した例はなかったし、今後ともまづないだらうと桂子さんは予想してゐる。

桂子さんの見るところでは、この両者の保菌者なり遺伝的に感染しやすい体質の持主なりは比較的狭い特定の集団に限られてゐる。例へばインテリである。インテリの間ではマルクス教かキリスト教のどちらかに感染して発病する人の割合は恐らく十人に一人以上に高まるだらうと桂子さんは極めこんでゐる。このことも含めて、そもそもマルクス教とキリスト教を伝染性の病氣であるかのやうに見てゐるのは桂子さんの偏見と独断であるが、桂子さんは自分でもそのことをよく承知してゐて、なほ恥ぢる様子は全然ない。それで例へば、遠藤周作氏の『人間のなかのX』の中の「次々と友人が受洗するのを見て」といふ文章などを読むと、不謹慎なことではあるけれども、次々にコレラ患者が発生したり次々に人が発狂したりするニュースを聞かされるやうな気分には襲はれる。SFめいてくるが、この分では氣が付いたら自分のまはりはいつのまにか人間の姿をした宇宙人ならぬ日本人の姿をしたキリストの信徒ばかりになつてゐるのではないか、と空想して、ばかばかしい恐怖に思はずにやにや笑つたりする。冗談ついでに言へば桂子さんはかういふ時によくエルンスト・ヘッケルの説を思ひだす。ヘッケルによれば神はガス状の哺乳動物である。これが毛穴、口、鼻、耳その他の穴から侵入して人体に取憑くと、人はキリスト教徒となるのである。もつともこの種の喩へ話となれば、キリスト教やマルクス主義その他の伝染性觀念をウイルスに喩へる方が一層適切かもしれない。

作家や文化人の間でキリスト教のウイルスが近頃勢を盛返してゐるのはどういふ事情からだろうか。この人種の生態に詳しくない桂子さんとしてはそれを測り知ることはできない。小説書き

を仕事にしてゐるやうな人は、演奏家や芸人の一部が麻薬に手を出したがるのと似た事情から、と言つても結局のところその事情はよくわからないが、キリスト教に縋りたくなくなる傾向があるのだらうか。さうだとすると小説書きといふ仕事は余程苛酷で不健全なものであると同時にいい気なものであることになる。さう思つて桂子さんは次々と受洗したといふ遠藤周作氏の友人なる人の名前をもう一度見て、軽率な判断を下すのは慎しまなければならぬと思ひかへした。何しろその作家、文化人たちの書いたものをほとんど読んだことがないのに気が付いたのである。

もつとも、遠藤氏の友人とされてゐる人たちに限らず、キリスト教に入信する人たちの多くは心身の大病が大怪我に相当する打撃を受けたことがきっかけでキリスト・ウィルスに感染してゐて、その点は桂子さんにも理解できるやうな気がする。しかし桂子さんの言ふ理解とは立場を交換してみた時に自分でもさうするであらうといふ同感もしくは是認を含むものではない。勿論同情の要素は皆無と言つてよい。未開人の一見奇怪な風習や動物が見せる奇異な行動について文化人類学者なり動物行動学者なりに巧みに説明してもらつた時になるほどと思ふ、その次元での理解である。桂子さんは自分でもさうするであらうとは思はない。第一、人生に躓いて大怪我をするとか心身の大病を患ふとかの不幸は自分には無縁である、自分の身に起るはずがないと決めたのである。甚だ傲慢不遜にしておめでたい確信であるが、万が一この確信が裏切られるやうなことがあつた時は負けたと思ふことにしてゐる。つまりモイラが振る骰子に負けたのであつて、負けたからユダヤ人が発明した神や十字架にかけられた人を主と仰ぐといふことにはならない。そこには普通の人間には理解できない大変な飛躍がある。

桂子さんに理解できるのは、心身の大病その他の人生の危機に直面してキリスト教（に限らず各種の宗教のどれか一つ）に縋る必要を覚え、またそのことに効用を見出すやうな人間が現にゐるといふ事実までである。しかし桂子さんの意見によれば、その人生の危機なるものは誰もが襲

はれるといふものではなくて、明らかに特定の人間だけが招くものなのである。恐らくその種の人間には好んで乾魎を歩くのとは反対の性向がもととあつて、知らず知らずのうちに愚行を重ねて危機を招き寄せてゐるのではないだらうか。丁度偏つた食生活を続けた結果胃癌を招くやうなものである。また人一倍弱い體質の持主にとつては普通の人ならば切抜けられる程度の苦境が生死を分けるやうな危機となる。弱い人は絶えず心身の病氣を抱へて危機と紙一重で生きてゐる。かういふ人は弱さを克服し、病氣を追放して危機を回避することができないばかりかそれを望んでもゐないので、弱さ、病氣、危機を手放す代りにむしろそれらを正当化してくれるものを求める。つまり救ひを求める。さらに言へば、この病人は治療を要するが、治療を要するためには病氣でなければならぬ。従つて病氣は根治してはならないのである。それで本人は自分が不治の病に犯されてゐると確信してゐる。しかし不治の病ならば治療を求めるのは無駄ではないか。さうは考へないところに救ひを求める病人の不思議な論理がある。これが昔左翼の学生が言つてゐた弁証法なる奇妙な理窟と一脈通ずるものかどうか、桂子さんにはそこまでの判断はできない。

それはともかく、桂子さんはある種の先天的に弱い人間やそのため現に病氣になつてゐる人間にとつてキリスト教が一定の効用をもつてゐることは認めてゐる。医者と薬は病人のために必要である。そしてそれがなくては病人が困る。ただし一般の健康な人間には関係ない。精神についても同じことが言へるのではないだらうか。そこで医者と病人は病院で暮し、さうでない人間は病院の外で暮すといふ区別が劃然としてゐて、お互ひに無関係にやつて行ける限り、桂子さんはキリスト教のやうなものの存在を認めるのである。自分が病氣で治療を要すると思ふ人はいつでも自由に病院にはいつて患者といふ身分を得ればよい。

ところがなかなかさうは行かないので困るのである。入院して患者になつた人は、あなたも一つ入院してはどうかとしきりに勧誘に来る。時には医者自ら勧誘に来ることもある。医者にして

みればできるだけ多くの患者が欲しいし、いつたん患者になれば仲間の患者を増やす活動をする
ことが行動療法か何かの一環であるらしい。さういふ勧誘員が現に桂子さんの家にも頻繁にやつ
てくる。保険の勧誘員に負けず劣らず熱心にやつてくる。保険の方は将来の安全をお買いになつ
た方がお得ですといったことを説く。得かどうかはこちらで判断して契約するか断るかを決める。
この方は筋が通つてゐる。桂子さんが怒り心頭に発するのは宗教の、と言つても大概はキリスト
教のどこかの派の勧誘員である。連中は入信すればお得ですといふことを余り説かない。それよ
りもこちらを病人に仕立てようとする。あなたは御存じないが実是不治の病に犯されてゐるのだ
式の勝手な診断を唱へて止まない。何か悩み、つまり自覚症状はないかと問診するので桂子さん
は格別ないと答へる。すると相手はないはずはないでせうと言ふ。人間みな病人といふ前提があ
るらしく、従つて万人が治療を要するはずだと主張する。桂子さんはさう言はれると最大の侮辱
を感じる。悩みなんかないし、すべて間に合つてますと答へると、相手はさうやつて自覚がない
ことがまさしく大変な病氣にかかつてゐる証拠だと言つて、例の「憐れみの目」といふ奴でじつ
と桂子さんを見る。何たる侮辱、と桂子さんは頭に血が上るのを通り越してむらむらと××（こ
の箇所伏せ字）がこみあげてくる。これで連中は正体を顕はしたと桂子さんは合点する。

日頃桂子さんは宗教家の説く愛なるものを信用してゐないが、それと言ふのもこの愛なるもの
には普通何P P Mかの憐れみがかならず混入してゐてこれを完全に遠心分離することは不可能だ
と思ふからである。他人を憐れむことで愛するとは何とも無礼なことではないか。憐れまれる位
なら憎まれた方がはるかに気持がいい。もつとも桂子さん自身は他人に対してこのどちらも実行
したことがない。己れの欲せざる所を他人に施すなかれである。ところがかの勧誘員たちは、己
れの欲する所は他人もまた欲すると信じて疑はず、己れの病氣は他人もまた当然分ち持つはずで
あると独断して疑はず、己れの意に従はない強情者に出会ふと、業病にかかつてゐることに気付